

とびこんできたもの 第1号

2024.2.27 よしのももこ

▶2月25日に岡山市内で「ありやまZINEスタジオ」というイベントがあって、わたしたち冊子のヨベリは出店の申し込みをしていた。前日にせがれが突然休言周をくずして、土曜続きの場所だった。暑りにどうということもないんだけど、島からわたしも連れ合いも揃って出てしまうのは少々危険なのでは？ということになり、わたしは島に残ることにして現場は連れ合いに任せた。

よしのももこさんとの遭遇

「よしのももこさんがうちのブースに来てくれて、少しお話しした」と連れ合いが言うもんだからびっくりしてしまった。少し前から、Twitterにわたしと同姓同名の方がいらっしゃるなあということには気づいていた。あるときそのよしのももこさんが土民生活流動本の本を読んだとツイートされているのを見ておどろいていたのだけど、なんと、よしのももこさんはわたしのツイートで「ありやまZINEスタジオ」のことを知って、東京から出店しにいらしたのだそうで、帰宅したうちの者からそれを聞いてわたしは「すごいなあ」と言った。「すごいなあ」としか言えなかった。よしのももこさんが高校のときの友達2人とときどきおしゃべりしている。あるときからそれをpodcastと

コカゲ組合のデモテープ

去年『ジドリケシゴム』をリリースして、横浜と岡山で朗読即売会をした。岡山の会に来てくれたのは3人で、その中の2人が女市弟だった。翌週、岡山の城下公会堂というところに大木温土さんのライブを聴きに行った。またその女市弟に会った。30年近く前にわたしのつくる音楽に角曲れていたのだと言っていた。今回、「ZINEスタジオ」にも来てくれた弟さんからうちの者が小さな紙袋を渡されたというて帰ってきた。中にはおにぎりせんべいとカセットテープが入っていた。2人は、わたしのしていたことに景気づけされカセットMTRを買って、2人でつくった曲を録音していたのだと手紙に書いてあった。その曲を聴かせてくれた。わたしがあれこれしているのは、「これなら私にもできる！」

というふうに誰かの何か、が重くことが起こる可能性があるから。わたしがただ、ここにあるものを馬鹿使して何かやっていたら、それは時空を走らしてどこか飛ぶからだ。フリのすることをありがたがれと言ってくるやつは必ずいるけど、聞かずにいることもできる。して遠くの人で生聞けるようにしている。そうするためにしゃべっているんじゃない。しゃべっている、がまずある。そのおしゃべりを文字起こしして小さな冊子にしたものを「水中喫茶」と名付けられたそのおしゃべりを冊子にしたものをよしのももこさんたちは見売していて、連れ合いがそれを買ってきてくれた。からわたしはその日のうちにそれを読んだ。なにか「主張したいこと」があって、それを読まされている感じがなくて、こんなふうに3人の人聞かあだこうだ小さく集まってしゃべる場がこの世にあることがうれしい。31ページで急にあらわれる「だれか」という発言者にびっくりして笑った。いつかお会いできるだろう。よしのももこさん

というふうに誰かの何か、が重くことが起こる可能性があるから。わたしがただ、ここにあるものを馬鹿使して何かやっていたら、それは時空を走らしてどこか飛ぶからだ。フリのすることをありがたがれと言ってくるやつは必ずいるけど、聞かずにいることもできる。

ZINE-SAY ノート VOL.2 熱情編

今回ひとりで会場へ行って来た連れ合いが「おもしろい…」となって買って帰ってきた冊子がこのZINE-SAYノート、ワープロ打ちした表紙と本文を中綴じにしたシンプルな体裁の冊子、作者は鳥取の方で、わたしと同じ年頃なんだそうだ。土民生活流動本の本を買ってくれて、もう一度声をかけにブースへきてくれたとのこと。この方のこの冊子がめっちゃくちゃおもしろくてびっくりしてききかへった。1935年、1955年、1950年生まれの3人の方々にインタビューをして、それを文字に起こしたものなんだけど、とにかく「生きる」の重みから目が潤みそう。会話はすごい